

菊池誠「エレクトロニクスからの発想」（講談社ブルーバックス 1982）より

やがて、少しずつ文献がとどき始める。

図書室に行って、アメリカの学術雑誌をしらべる時、

「……semiconductors……」

と、「半導体」の文字を目次の中に発見すると、カーッと血が頬に上るのが常であった。本当にうれしい。「これでまた、何か少しわかる」という期待から手がふるえたものである。

そのころ、もちろん、ゼロックスの複写機のようなものは無い。

わたしは文献を借りてきて、古めかしいタイプライターで、カーボン紙を七、八枚もはさんで、自分でコピーをうつのである。

今、わたしがタイプライターをうつと、多くの人がびっくりする。専門のタイピストほどにはいなくても、玄人のスピードでたたけるので、わたしにそんな特殊技能があったのかと思うらしい。そうではなくて、昔の苦勞の結果に過ぎないのだ。コピーを作る必要があった。

先輩や友達に配って、いっしょに勉強するのである。

何がうれしいとって、先輩と後輩が、新しい学問、新しい技術でいっしょに勉強して討論できるくらい、はげみになることはない。

考えてみるといい。もう成立してしまった学問では、新人は何をやっても先輩から教わるばかり、まちがえばしかられるのが当然、ということになる。

半導体やトランジスタは、日本全体が、ほとんど皆、新人だった。だから、少し誇張していえば、先輩後輩が、一体になってワイワイと議論する状況だった。物理学会でも、わたし達のセッションは、実に活発でいつも沸いていた。もう一つ、素粒子のセッションが、やはりそうであった。あちらは、坂田昌一、武谷三男、朝永振一郎といった人達が、若い連中といっしょに騒いでおり、半導体の会場も、先輩後輩が大声で議論していた。

その小さい驚きの中で、いちばん胸に答えたのは、ある日の午前中のコーヒー休みのでき事であった。

わたしの研究室の下、地下に自動販売機が並んでいて、午前と午後の休みに、わたしはよくそこでコーヒーや、アイスグリームを口にした。

第一に、このアメリカ的な機械に、わたしは別にそれほど違和感を覚えなかったこと、第二にそこでよく立ち話ができること、それが理由であった。なくなった声楽家の藤原義江が、アメリカのコーヒーの自動販売機は、いつも決まったところでピタリと止まるから味気ない、とよく話していたが、わたしには生来そういう反撥を持つところが無いので、好んでそこに行った。

今でもアメリカの出張でM. I. T. へよると、この場所に行ってアイスクリームをとり出し、食べながら、昔のことを思い出す。懸命な生き方をしていたころのことが頭に浮かんで、アイスクリームがほろ苦くなることもある。

さて、その日、いつものように、そこに行ったら、電気工学科のボスのエライアスと、床そうじのおじさんのジミーとが、紙コップのコーヒーをすすりながら、税金の話をしているのである。

どう見ても、アメリカの『平民社会』の姿がそこにある。

仕事という契約の世界では厳然として立場の上下がありながら、一私人にもどる時、人びとは、本質的平等をとりもどす。封建性のきらいなわたしは、この二人の立ち姿を、しばらくうっとりながめていた。